

第 15 回 江戸初期の外交・鎖国

(本来は、前回の第 14 回とこの回の内容までが 1 回で進められるべき内容でしょう。60 分×3 回ないし、90 分×2 回の予備校の授業では、そこまで進まないとやり残しが生じたはずでした。テキストもそうになっていたと思います。それを何故分けたのかと言いますと外交史ということもあって、世界史と合わせて考えたいと思ったからです。)

1. 初期外交

(江戸初期の外交です。例によってオランダ船の漂着からはじまるのですが、ここでも、日本史では、毎回「オランダ船が漂着しました〜！」になるのです。このあたりのことはこれまでの回でさんざん書いてきましたから、ご理解いただけるとと思います。つまり、何故、オランダが台頭し、日本に着たのかの裏づけがないまま、はじまるからです。)

オランダ (ネーデルランド) の台頭

ごく簡単に (簡単すぎるが) オランダについて述べておく。

ネーデルランドは、16 世紀はじめから、アントワープ市がヨーロッパの中心市場として繁栄していた。宗教的には、反宗教改革派の勢力が強かったが、スペイン国王は、カトリックの信仰を強制し、弾圧した。その後、スペインに対する抵抗運動が高まり、1581 年ネーデルランド連邦共和国 (オランダ) が独立した。

こうして、オランダは、アムステルダムを中心に驚異的な経済発展を遂げる。これまでの話の中で、教えた世界システム論を思い出して欲しい。スペインから世界の経済の中心がオランダ (アムステルダムを拠点) に代わっていったのである。ちなみにオランダは国王のいない共和国であった。

世界の中核 (中心国) は、スペイン (マドリード) から、オランダ (アムステルダム) に移っていった。オランダが中心になったのは、毛織物、造船業、北洋の漁業などを結びつけ、世界貿易の中心になった。加えて、金融面で支配権を確立したことである。こうしたことが背景にあり、世界の中心は一時期、オランダになり、その結果、アジア貿易に参画したオランダが、日本と関係を持つことになるのです。

江戸幕府は、秀吉の時に悪化した外交関係の修復に努め、平和外交。貿易発展を進めた。

1600 年、オランダ船リーフデ号が豊後臼杵湾に漂着した。大坂城で船の代表者と会見した家康は、彼らを保護し、日本滞在を許した。イギリス人ウィリアム＝アダムスとオランダ人ヤン＝ヨーステンには領地と屋敷を与え、外交顧問として登用した。アダムスは、三浦半島に屋敷と領地をもらい三浦安針の名で永住した。ヨーステンは、江戸に住宅を与えられた。八重洲の地名がヨーステンの住居があったことを今に伝えている。ところで、彼らとの関係によって日本は、オランダ・イギリスとの交流を持つことになった。オランダ

は1609年、平戸にオランダ船が来航して以来、関係を続けることになる。イギリスは、1613年、国王ジェームス1世の国書を持ってジョン＝セーリスが平戸に来航し、ここに商館を建てたが、1623年、オランダとの競争に敗れ、日本から撤退する。

スペインとの関係修復は家康が望んだことである。1610年、メキシコに向かうルソン総督のドン＝ロドリゴに京都の商人田中勝介を同行させ、浦賀から出航させた。また、伊達宗政は、約500トンの洋式帆船を建造し、家臣の支倉常長を月の浦から出航させた。常長は、フランシスコ会宣教師ルイス＝ソテロと共にメキシコのアカプルコに着き、陸路をベラクルスに出て、スペイン船でスペインに渡り、スペイン国王やローマ教皇パウロ5世とも会見した。これを**慶長遣欧使節**という。しかし、常長の旅行中にキリスト教禁止令が出され、スペインの協力を得ることが不可能となり、貿易再開の目的は実行されなかった。

ポルトガルとは中国産生糸（白糸）の購入で関係を保った。この貿易は、ポルトガルが莫大な利益を得ていたことから、幕府は1604年、**糸割符制度**を導入した。幕府は、糸割符仲間という商人集団が輸入生糸の価格を決定し、その価格で全輸入生糸を一括購入し、これを仲間に分割販売させることにしたのである。ポルトガル側はこれを「パンカダ」とよんだ。仲間は当初、堺・長崎・京都の3カ所の商人だけだったが、その後1631年、江戸・大坂の商人が加わり、5カ所商人となった。ポルトガルとは、1608年、マカオで有馬晴信の船員とポルトガル人との紛争が起きたこと、翌年ポルトガル船マードレ・デ・デウス号が長崎に来航した時、有馬が報復としてこの船を焼き払った（マードレ・デ・デウス号事件）こともあり、事件後、貿易は次第に衰退していった。

2. 朱印船貿易

（このところも、やはり世界史との関係が考慮されるところです。）

室町時代の日本の交易、戦国期を中心とするスペイン・ポルトガルとの交易についてはこれまで話したとおりである。ポルトガルは東廻り航路を、スペインは西廻り航路を取って、世界貿易路が完成した。大航海時代、ムスリム商人に代わり、ポルトガル商人が交易の中心を占めるようになる。インド洋に南北に連なるモルディブ諸島で一番の拠点がマレー半島である。ここはムスリム商人の貿易拠点であったが、新たに登場したポルトガル人が占拠し、要塞が築かれた。

15～16世紀にかけて繁栄を誇った東南アジア最大の中継貿易港はマラッカであった。15世紀はじめ、王族の1人が当時、漁村に過ぎないこの土地に部下を連れてやってきて、新国家を建国した。1511年、ポルトガルは激しい攻撃をかけ、マラッカを占領する。マラッカは東洋最大の一大集散地となり、中国・東南アジア・インド方面からのすべての船が集まってきた。中国からは生糸・絹織物・陶磁器・銀などが。マラッカからは、香料が、インドからは綿布・染色毛織物・ガラス玉・木材・銅・鉄などであった。このマラッカにはレケオ船とよばれる琉球船も那覇港からやってきた。

中国船の貿易は実は密貿易であった。海禁政策が取られていたことはすでに触れたとおりである。彼らの代表者が例の王直だったのである。中国東南部沿岸地方の豪族（郷紳層）たちは、役人をだまし、賄賂を与え密貿易を行った。実際には、豪族に雇われた中小商人や沿岸の貧民たちであった。彼らはやがて地方豪族の支配から脱し、自立して貿易を行おうと海上や沿岸都市で反乱を起こした。この反乱は、日本も巻き込み後期倭寇と合流し、16世紀中頃に大反乱となった。

1570年のマニラ付近には中国人40人、日本人20人が住んでいた記録されている。日本人の海外展開も進んでいた。

朱印船貿易とは、為政者の渡航許可書＝朱印状を持った船での貿易である。そもそもは豊臣秀吉が朱印状を与え、貿易を認めた。しかし、秀吉は朝鮮侵略を行ったため、貿易は一時中断してしまう。琉球が朱印船以上に東南アジアとの関係で力を持っていたことは言うまでもない。何故なら、琉球は日本とは別の王国であり、幕府の支配を受けていない。琉球と対立するのはポルトガル船であって朱印船ではない。

その後江戸幕府は、朱印船貿易を復活させた、1604年～1635年までに朱印船は350隻余りが出航した。行き先はマカオ、台湾、フィリピン、ベトナム、カンボジア、シャム（タイ）、マラヤ、インドネシアなど東南アジア全域に及ぶ。朱印船の経営者は、島津・松浦・有馬・鍋島・加藤・細川などの九州の諸大名と大商人、京都の角倉了以、茶屋四郎次郎、大坂の末吉、長崎の末次などであった。船に乗ったのは商人、船頭の他、牢人・武士や禁教令で弾圧されたキリシタンなどであった。船は平均400トン、大きいものでは角倉了以がシャムに派遣した長さ20間（約36m）、幅9間（約16m）で800トン、400人を乗せたという。わが国からの輸出品は、銀をはじめ、硫黄、樟脳、漆器、扇子など。輸入品は、生糸、絹織物をはじめ、綿布、羅紗、蘇木、砂糖、鉛、錫などであった。

北風の季節風が吹く冬に日本から出航し、船は1～2カ月かけ、南海の諸港に到着する。輸出品・輸入品の売買を行い、今度は南風に乗り日本に帰る。約半年間の航海であった。江戸時代初頭に海外渡航した日本人は約10万人と推定されているが、そのうち7000人～1万人は東南アジアの日本町に居住した。この町は自治制を敷いたものもあった。

幕府は、1604年から35年までの間に350隻余りの船に朱印状を発行し、貿易を許可した。朱印船は、島津・松浦・鍋島などの九州の大名や角倉了以・茶屋四郎次郎ら京都の豪商、末吉孫左衛門ら大坂の豪商、末次平蔵・荒木宗太郎ら長崎の豪商が経営にあたり、中国人やアダムスらヨーロッパ人も加わっていた。輸出品は、銀・銅・硫黄・刀剣などで、輸入品は中国産の絹織物・皮革（鮫・鹿）・象牙などであった。

日本人の海外移住も増え、東南アジアの都市には自治を認められた**日本町**が作られた。ビルマ（現ミャンマー）のアラカン、シャム（タイ）のアユタヤ、コーチのツーラン・フェフォー、ルソンのディラオ、マニラ郊外のサンミゲル、カンボジアのプノンペンなどである。（ちなみに、ベトナムのホイアン郊外には、日本人の墓がある。貿易でやってきた後

帰国できずに現地で亡くなった人は多数いるはずである。)

アユタヤの日本町の頭となり、後にリゴール太守となった山田長政は、こうした朱印船貿易に関係した商人の1人だった。

3. 朝鮮との関係

秀吉の朝鮮出兵によって関係が途絶えた朝鮮との関係は、対馬の宗氏の努力で修復することができた。1607年からは朝鮮使節が来日した。但し、1607年・17年・24年の3回の使節は朝鮮の使節であるが、回答兼刷還使といい、日本に連行された朝鮮の人々を送還することが目的である。通信使は都合12回来日している。さらに、1609年、宗氏と朝鮮との間に己酉（慶長）約条が結ばれ、歳遣船（毎年行く船）20隻を送り、貿易は釜山の倭館で行うこととなった。

4. 琉球との関係

琉球へは1609年、薩摩藩主島津家久の出兵が行われた。これにより琉球は、薩摩藩の配下に入った。琉球王尚寧が捕らえられ、人質となった。島津は那覇に仮屋を設置し、奉行が在住したが、中国に対しては琉球に冊封を受けさせ、貿易を盛んにさせてその利益を奪った。さらに、琉球からは將軍の代替わりごとに慶賀使を、琉球王の即位を感謝するために謝恩使を送って来るようにさせた。慶賀使は全部で18回派遣された。

5. 蝦夷地との関係

江戸時代に入り、蠣崎氏が松前氏と改名し、大名としてアイヌとの交易を認められた。蠣崎氏は家臣に商場知行制というやり方でアイヌとの取引の場所を与え、交易による利益を家臣の俸禄としたが、1609年、シャクシャインの乱が起こった。これは和人の不正行為が問題になったもので、シャクシャインは2カ月の激戦を展開したが、和議の席で和人がシャクシャインを殺害し、乱が終了した。この結果、商場知行制が改められ、特権商人に取引場所を貸し、そこからの運上金を徴収し、俸禄とする場所請負制となった。なお、1789年には、和人が千島に進出し、クナシリ・メナシ（国後・目梨）の乱＝寛政の乱が起きている。

6. キリスト教禁止

1612年、幕府は幕領（江戸・大坂・京都・長崎）においてキリスト教を禁止した。その背後には、本多正純の家臣岡本大八の事件があった。岡本もキリシタンで、同じキリシタ

ン大名の有馬晴信から旧領安堵をはかろうとするために賄賂を受け取ったことが発覚した事件である、また、翌年には、キリスト教禁止を全国に拡大した。

1622年には、宣教師・信者 55 名を捕らえ、長崎で処刑する事件（元和の大殉教）も起きている。こうした一連の禁教令が出された理由は、①信者の団結が幕府支配の障害になると考えられたこと。②スペイン・ポルトガルの侵略を懸念したことがあるだろう。

1637～38年にかけて**島原・天草一揆**（島原の乱）が起きた。島原藩主松倉重政と天草藩主寺沢広高は、1634年以來凶作で農民が苦しんでいるにも関わらず、苛酷な取立てを行った。これに耐え切れなくなった農民たちは、小西行長の家臣、益田氏の遺子、益田四郎時貞らキリシタン牢人をリーダーに反乱を開始した。蜂起した農民は3万8000人余りにも達し、参加率100%の村もあった。（島原の乱とよばずに、島原・天草一揆というのは、島原の乱がイメージとしてキリスト教徒の反乱というイメージが定着していることが原因です。村人全員が参加したということは、キリスト教とは無関係に、苛酷な徴税に反対しての百姓一揆の性格の方が濃厚だということです。大体考えてもらえればわかることですが、村人全員がキリスト教徒ってことはありません。ヨーロッパの村じゃないのですから。）

反乱に加わった農民たちは原城に立て籠もり、幕府の板倉重昌と戦った。幕府軍は総攻撃をかけたが大敗してしまった。そこで、幕府は老中松平信綱を派遣した。信綱は「知恵伊豆」とあだなされた人物で、12万余りの兵を動員し、あわせてオランダの軍艦の原城攻撃を要請した。こうしてついに乱は鎮圧された。（オランダってキリスト教国じゃないの？そうですが、先の説明からも理解できると思いますが、カトリック国ではありません。プロテスタントの国です。日本の信者はカトリックですし、オランダにすれば、この機会に恩を売っておけば、後で色々便宜を図ってもらえるという理由で協力したのだと考えられます。）

1640年、幕府は、宗門改役を設置し、絵踏を行わせ、宗旨人別改帳に登録させることにした。絵踏がいつから行われるようになったかについては、不明だが、1640年よりは早く実施されていたと考えられる。マリア像やイエス像を刻んだ金属板を踏絵といい、これを踏む行為を絵踏という。絵踏は、1858年日米修好通商条約が締結されるまで続けられた。なお、その後も残っていた信者たちは、「かくれキリシタン」としての信仰を守るが、長い禁教の結果、神仏と融合し、民間信仰化した独特のものに変化した。

あわせて、日蓮宗不受不施派も管理・統制された。このグループは、「法華経を信仰しない者には施さず、また施しも受けない」という信念を持ち、支配者のいいなりにはならなかったからである。

7. 鎖国

（この「鎖国」についての生徒たちのイメージは、依然として「国を閉ざす」というイメージです。果たしてそういうイメージが良いとは思えません。しかも、江戸時代には、

現在とは違って「鎖国」がマイナスイメージで受け取られていなかったわけです。おそらく入試でも、そのあたりの議論を受けて出題されているとも思います。ですから、ここは教師がいかにかかっているように思えます。さしあたり、荒野泰典氏の「海禁と鎖国の間で」、『あたらしい歴史教育』第2巻、大月書店、1993年所収、あたりを読んだ上で授業すべきだと思います。)

禁教と並行し、鎖国政策が実施される。よく知られているように、「鎖国」とは、ドイツ人医師ケンペルが1690年に来日し、その滞在記録をまとめた『日本誌』の付録をその後、長崎オランダ通詞志筑忠雄が翻訳した時に用いた言葉である。翻訳は1801年に完成したから、それまでは「鎖国」という言葉はなかった。つまり、別の言い方をすれば、幕府は文字通り国を閉鎖したとは考えていなかったといえる。この政策を何故幕府が採用したかについては研究者の間でも意見が分かれているが、禁教令の徹底、貿易の管理強化、さらには幕藩体制を強化するためだったと考えられている。

1624年、スペイン船の来航を禁止した幕府は、1633年からいわゆる「鎖国令」を出していった。1633年の最初の「鎖国令」は、朱印状以外に老中が発行した奉書を持たなければ、朱印船の経営はできないというものであった。奉書は御用商人にだけ発行されたから、西国の大名たちは貿易に加わることが不可能になった。翌年の「鎖国令」は、海外往来と通商制限が命じられた。1635年、ついに海外渡航及び帰国が全面禁止された。これで「鎖国」は一応達成されたが、翌36年にも「鎖国令」が出された。出島にポルトガル人を移住させ、日本人との間に誕生した混血児を追放している。

1639年、最後の「鎖国令」が出された。「ガレオタ」というポルトガル船の来航が禁止されたのである。オランダはこうした動きを喜んだが、オランダも同様の体制の中に組み込まれていく。1641年、オランダ人は、出島にのみ居住することを認められ、旧来の平戸商館は破壊された。また、日本人使用人を雇用しないこと、オランダ商館長（甲比丹＝カピタン）を1年ごとに交代させること。糸割符制をオランダにも適用させることが要求された。

鎖国によって確かに幕藩体制が強化・安定し、「徳川の平和＝Pax Tokugawa」とよばれる天下泰平の世が続いた。

◆鎖国

キリスト教への対応を基軸としつつ、当時必要不可欠となっていた対外貿易統制の必要性をすりあわせることにより作り出された国内・対外政策

「鎖国令」は長崎奉行への職務規定にすぎなかった。

c f : 海禁＝沿岸部に対する出入国管理体制のことを意味する。

8. 鎖国後の貿易

貿易は、長崎奉行の管轄で実施された。オランダは、生糸・絹織物。毛織物などをもたらし、日本は銀・銅で支払った。1644年には「オランダ風説書」が提出された。糸割符制を適用された貿易は、1655年廃止され、相対貿易となったが、1685年、糸割符制が再興されると貿易額が制限された(定高仕法)。

オランダ以外に中国とも貿易を行っている。明は1636年、清国に代わった。輸入品は生糸・絹織物・書籍などで、輸出品は、銀・銅・海産物(倭物)であった。幕府は、増加する中国船を1688年、70隻に限定し、長崎郊外に唐人屋敷を作った。